

11. 杉野屋の葬制の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4988

11. 杉野屋の葬制の変化

榊 原 毅

- I. はじめに
- II. 杉野屋の葬制を考えるにあたって
- III. 杉野屋の葬制とその変化
- IV. 葬制の変化に対する住民の意識
- V. おわりに

I. はじめに

当たり前のことだが、集落において葬制だけが単独で変わってきたのではない。その変化の背景にはそれに先行するような形で、もっと大きな全体を包むような社会的な変化とそれらに彩られた杉野屋の現状というものが存在している。今回このようなテーマ設定を行った理由には、今までの生活の中で意識することのなかった葬儀の形式そのものへの興味に加え、そのような葬制の変化を追うことで見えてくる事実への関心があり、この与えられた調査の機会を使って、それらを一度正面から見据えてみようと考えたのである。ただ、聞き取りを行った件数も数件にしか及ばず、その調査範囲でやや強引にまとめられた本稿には細かな部分において、事実と食い違うような記述もあるかもしれない。そこに、若干の怖さがあるが、そういった部分を差し引いたとしても、今回のこの貴重な体験をなんらかの形にすることは、私にとって十分意義のあることだと確信している。

II. 杉野屋の葬制を考えるにあたって

1. 杉野屋の宗教的環境

杉野屋では、ほぼ全戸が浄土真宗の門徒であり（残りの数戸は日蓮宗）、その中でもお西（本願寺派）がお東（大谷派）に比べ圧倒的に多い。また、集落（杉野屋）には、お西の寺が2ヶ寺あり、その門徒も多く、何かと寺との縁を感じさせる集落である（詳しくは10章参照）。そのような理由から、この章での葬制とは、集落内における浄土真宗の葬制を指すこととする。

それから、杉野屋の葬制を考える場合、杉野屋には集落全体で見られるような伝統的な様式がしっかりと存在するのではなく、どちらかと言うと、宗派や寺によってその様式が異なるのだそうだ。また、一般的に言って、杉野屋の葬儀は全体的に簡素なものであるらしい。

2. 杉野屋の社会組織

杉野屋では、15の班が、戦時の隣保班を基礎として存在する。そして、ある班内の家で葬儀が営まれる場合、その手伝いを同じ班の構成員で行うということが伝統的に存在し、特徴的だ。しかし、その際の手伝いの内容は、細かな部分において各班で異なっており、その全てを把握することは今回の調査では出来なかった。

3. 社会的な変化

いくぶん羅列的だが、杉野屋の葬制に変化を与えた要因で重要と思われるものを以下に挙げてみた。ここでの細かい言及は避けるが、それぞれ本章の中で何度か出てくるタームとなっている。

1つ目は、1960（昭和35）年における全国的な生活改善の動きの中での、羽咋市新保での広域斎場の誕生である。これによって、集落ごとに存在した斎場である「サンマイ」が集落から姿を消し、葬制に大きな変化をもたらした。

2つ目は、広域斎場の設立と前後しての、初期は主に互助会という形で葬儀を総合的にサポートすることに始まった葬祭業者の登場、そしてその後の葬祭業者の参入増加である。現在、程度はそれぞれで異なっているが葬祭業者の関わらない葬儀は行われなくなった。これによって、葬儀も以前と比べて華やかさが増し、伝統的な要素にも変化が生じてきたが、金沢などの都市と比較した場合、杉野屋周辺の葬祭業者は地域ごとの様式に合わせる地域密着型の傾向が強いそうだ。また、これは班内での葬儀の手伝いの軽減にも繋がっている。

3つ目は、生活改善の気風の中での志雄町全体としての葬儀のある面での簡素化で、これによって、香典等は原則として一律のものとなっていった。

4つ目は、医療の発達、周辺市町での公立院の設立（1960年代あたりから）であり、このことが入院という文化を杉野屋に広げ、死を迎える場は集落の外へと移動して行った。

5つ目に挙げる集落外への勤めの増加は、葬儀における参列者の数を増やした。

そして、6つ目はこれからの葬制の変化を考えていくにあたって重要と考えられる、2000（平成12）年12月の羽咋市におけるセレモニー会館コスモの誕生である。これにより、今後葬儀が集落外で行われるという形も増えていくかもしれない。

4. 本章での記述形式について

本章では、これ以下、「Ⅲ. 杉野屋の葬制とその変化」として、以前の杉野屋における葬制のあり方と、現在におけるその変化の様子を述べていこうと思っているのだが、その前に、この「以前」について言及しておかなければならない。

この「以前」についての記述は、はっきりと目に見える葬制の変化を生じさせた広域斎場の登場を1つのターニングポイントと捉え、それ「以前」と出来る限り一致するように心がけている。だが、葬制のあり方の個別的な部分において、私自身その変化の年代について非常に曖昧にしか把握できていない点も多い。よって、広域斎場の誕生以前からあった様式を近年の傾向と勘違いしていたり、またそれ以降の変化をそれ以前の様式であったかのように勘違いし記述している可能性が十分考えられるのである。よって、Ⅲ.の記述には1960年という境の設定が、かならずしも意味を成さない危うさがある。

それと共に、もう1つ言及しておかなければならないことがある。それは、1960年「以前」の範囲である。その「以前」がいつからを指すのかについては、実はこれも規定するのが大変難しいが、この章ではとりあえず、1952（昭和27）年以降という中途半端な年代を充てることしか出来ない。それではあまりに狭い範囲の時期しか指していないことになるが、実は、今回の調査で具体的な部分にまで葬制の話が及んだのは、この1952年からなのである。それよりさらに遡れば、戦争があり、戦後の極貧の時代がある。その中での葬制のあり方はまた違ったものだっただろうし、戦前ともなればもっと古くからの様式が色濃く残っていたかもしれないと考えられる。そういった葬制のあり方を具体的に聞かずに、「以前」という言葉で括ってしまうには無理があると考えたので、この年代設定の理由を少し長く述べた。以上の曖昧さを前提とし、以下の記述に移る。

Ⅲ. 杉野屋の葬制とその変化

1. 葬儀を行う場所

以前の葬儀は、ほぼすべて自宅で行われていた。自宅で行えなかったのは、学校の校長や区長、地元の名士などの葬儀で、彼らのように参列者が多くなる場合には、集落にある寺が葬儀会場に使用された。以前は、どの家も田の字型の間取りをしており、部屋を仕切る建具をはずせば、そこには、葬儀を行うのに十分な広い空間が生まれた。田の字型の家は、冠婚葬祭を第一に考えられた設計がなされているものである。

そして、現在、自宅での葬儀が無くなってしまったかという、決してそういうことはない。

集落で近年行われた葬儀では、自宅を会場にしたものが7割を超えるほどだったそうだ。ただ、家の造りもだんだんと現代風の、日常生活を第一に考え、たくさんの小部屋が壁で仕切られたタイプのものに変化してきている。また、葬祭業者が導入した規格品の「祭壇」は、今まで以上に大きな空間の葬儀会場を喪家に必要とさせるし、さらに外へ勤めに出るようになった人やその家族の葬儀には、集落外からたくさんの参列者が呼ばれるようになり、それも会場に必要な広さを拡大させている。そのため、集落内の葬儀は集落内の2ヶ寺で行われることが多くなってきた。だが、これは、志雄町全体で考えると特殊なケースで、他の集落では例えその中に寺があるところでも、一般的に各集落にある集落会館を葬儀会場として使用している。杉野屋にも、集落センターという名の立派な会館が存在し、冠婚葬祭に利用できないというわけではない（1997年から使用可）。そこには、杉野屋では集落内に2ヶ寺もあり、しかもその門徒である家が非常に多いという特殊な事情がある。

だが、杉野屋に限らず近隣地域一帯では、さらに新しい変化が現在見られる。それが、羽咋市に2000年に建てられたセレモニー会館コスモへの葬儀の移動というものだ。杉野屋では、当初集落内の人（特に高齢者）が行きづらいということで使用が控えられていたそうだが、今年（2003年）になって初めてそこでの葬儀があったらしい。この要因は、セレモニー会館コスモでの使用料金が少し高い分、サービスが充実していること（その中に集落の人々の送迎というものはあるのだろうか）や、参列者の更なる増加などであろう。

2. 葬儀日程

以前は、現在のオツヤにあたるものは故人が臨終を迎えた時刻にもよるが、亡くなった当日に営まれ、そこで近親者の者もその他の者も弔問を行った。そのため、葬儀は亡くなった翌日に行われるという形が一般的であった。しかし、遠方からの参列者（殊に勤めの関係等で広がっていった繋がり）のためにもオツヤが翌日に行われるほうが都合が良いことや、ドライアイスの導入（これは葬祭業者によってもたらされたと思われる）により遺体の長時間の保存が可能になったことで、現在のように、これも故人が臨終を迎えた時刻にもよるが、葬儀日程は一般的に、亡くなった当日は近親者のみで故人を弔い、翌日にオツヤを行って一般の参列者が弔問を果たし、そして翌々日に葬儀が営まれるという形がとられるようになった。

3. 臨終～オツヤ

（1）以前のあり方

臨終は、公立院が出来るまでは皆、院ではなく自宅で迎えられた。亡くなる前の死に水はとれた場合にだけ、和紙で作った紙縫りに水を含ませ行ったという。それから、掛かっていた医

師を呼び、死亡を確認し、死亡証明書を作成してもらった。公立院の出来る前は、医師に掛かるというのは往診に来てもらうことであった。ただし、医師に使いを出す前に、家の者で一度、薄紙や鳥の羽を遺体の口に乘せて死亡を確認することもあった。在所では死者を「ガイ（遺骸の骸の意）」と呼ぶ。医師による死亡確認の後、ガイは家の者の手によって清められる。ガイの清めは「ユガン」などと呼ばれており、これは現在も行われる「湯灌」のことに間違いないだろうが、杉野屋で行われていた作法については明らかに出来なかった。臨終はすぐに親族、同じ班のイエ（班長を中心に）、区長、寺、町役場等に伝えられる。その場合、どの家にも電話のなかった時代なだけに、遠方の人には電報が、また、少し離れた場所に住む人たちならば、「飛脚」という手段（つまり徒歩のこと）が用いられた。そして、集まった親族と班の人々によって、葬儀の準備が行われていくこととなる。ただ、班の人の手伝いに関しては、葬儀当日の朝から行われるという形が一般的であったようだ。葬儀の準備には道具の飾りつけや障子の張替えなどの会場設営、台所の仕事、香典受付、会計（帳面係）、買い物係（通い帳を使った）などがあり、身内でも在所（杉野屋）の外に出た者には台所仕事をさせないといったような決まりもあったそうだ（これは家々によるのであろう）。

臨終後、布団に北枕西向き（部屋の間取り等で必ずとはいかない）に寝かされたガイの枕元には「枕飾り」が施される。枕飾りは白い布のかけられた台の上に、ろうそく、線香、シキミ（またはシキビ・シキベ）の枝または一本松、他にはオボクサン（仏器に米を盛ったもので蓮のつぼみをイメージしている）、香炉、鈴などが置かれる。シキミが普及する前には一本松が一般に使用されていた、という話をしてくれた人もいた。シキミには、遺体から出る匂いを和らげる効果があり、集落内でこの木を植えている家から枝をもらってきた（現在もこれは変わらない）。また、枕飾りのほかに布団の上に剃刀や小刀、ハサミ等の刃物も置かれた。これは、獣（猫という人が多かった）がガイの上を跨いだり、ガイを舐めたりしないようにという意味のお守りであった。この時、身内のうちの誰かが必ずガイに付き添い、ろうそくと線香の火が絶えないように番をした。これは、葬儀の当日、納棺のときまで行われる。これが、「ヨトギ」である。

枕飾りが設けられたのち、夕方ごろになると門徒となっている寺の住職が枕づとめ（臨終勤行）にやってくる。在所では、住職のことを「ゴボウサン」（御坊さん）と呼ぶ。在所の寺のゴボウサンの場合は、懐中仏を枕飾りの台に置き、それに向かって枕経を唱える。そして、懐中仏は葬儀が終わるまで、喪家に預けられる。しかし、実のところ、この懐中仏というものがいつの年代から使用されているもので、在所以外のお寺の場合には使用されているのかなどについては分かっていない。枕づとめが終わると、ゴボウサンは、寺によっては説法の後、帰っていく。

前述したように、臨終の翌日にオツヤが営まれる現在と違い、以前はこの日に一般の人たちは喪家へ弔問に訪れた。一般の人たちといっても、そのほとんどは集落の人たちであったこともあり、その服装は普段着のままであった。急な訃報を聞いて駆け付けて来た、といった感じであったのであろう。また、集落内の多くの者が、生前の故人との付き合いの深さには関係なく参列した。そこには、集落の共同体としての「地縁」というものが存在しており、この参列風景は現在も見られる。そして、参列してくれた人には、饅頭や落雁（サンボウに三日月形のもの貼り付けて）などのお菓子が配られた。

翌日になって納棺が行われたが、共同斎場が出来るまでは、お棺は寝棺ではなく座棺が使用された。杉板などで簡単に作られたこの座棺（3尺×3尺ぐらい）は、集落に住む大工の手によって作られたものであったそうだ。納棺に際してガイは髪を剃られ、場合によっては死に化粧を施された。また、死に装束も用意された。身にまとう白い着物は、白いさらしを使ってヨトギの晩に身内の女性の手によって仕立てられたものであったり、浴衣のようなものであったりと、家によって違ったようである。その他に三角巾、手甲、頭陀袋、六文銭、脚絆、足袋、草鞋、数珠などのようなものも、その家々の裁量によってガイに着せられたり、お棺に入れられたようだ。また在所では、法名を書いた紙（送り法名）も入れられる。ガイをお棺に入れるのは、「血の濃い」身内の役目であった。ガイの膝を折り、その下から「ゴクラクヅナ（極楽綱）」又は「ゴクラクナワ（極楽縄）」と呼ばれる綱（縄）を通し、首の上に廻して強く縛った形で座棺に納めた。そのあと、お棺には豆柄が入れられ、蓋がされたのち、藁縄で二重に縛られた。

一方、葬儀会場の準備は、部屋ごとの仕切りが取り外されたのち飾り付けが行われた。お棺の左右にはシカ（紙花・死花）、白バス（蓮）、六灯（ろうそくを立てるもの）が対になるように置かれ、その他に灯籠などが置かれることがあった。シカや白バス、灯籠などは皆、準備をする者たちの手によって作成された。シカや白バスを立てる台などは、集落の斎場（「サンマイ」）にあった倉庫に保管されているものを共用していた。また、「赤衣さん」などと呼ばれる、浄土真宗の門主様（御代前）の絵が描かれた掛け軸を寺から借りてきて、床の間などに飾ることもあった。これを寺まで借りに行くのは喪主の役目で、紋付・袴（この色が白であったか黒であったかは定かでない）に裸足といういでたちで取りに行くことになっていた。帰ってくる時には、首に掛け軸の紐をかけ、両手に掛け軸を抱えて持ってきた。また、白バスのほかに金バス（蓮）、銀バス（蓮）も用意された。これらは、骨上げが済んでからの中陰壇での装飾品であった。そのほかに足りないものがあれば、買い物係に通い帳を使って買ってきってもらったり、隣近所やヨボシ親子の間で貸し借りが行われた。また、台所では、葬儀の準備を進める親族や班の人への差し入れや、当日に振舞われる精進料理が作られた。精進料理は、油揚げや豆腐に加え、大根、ゴボウ、山菜、こんにゃくのような畑で取れるものを使った煮物などであった。

(2) 現在までの変化

現在、多くの場合、臨終は院で迎えられている。院への入院の増加は、公立院等の医療施設の整備に加え、家族の構成員数の減少や外への勤めの増加による自宅での介護の困難という変化も関係しているようだ。地域に住む開業医が減ったことから、医師の往診は30年ほど前から無くなっていったそうだ。

臨終後のガイの院から家までの搬送は、その院と契約している業者の車によって行われる。

遺体の清めは、身内の手ではなく、院で亡くなった場合は院側で、自宅で亡くなった場合でも葬祭業者の手によって行われるようになった。

臨終の知らせは、電報ではなく、電話などによって伝えられている。

そして、オツヤが新たに設けられ、葬儀が亡くなった日の翌々日に営まれるようになってからは、ヨトギが2日続けて行われるようになり、また班の人々の手伝いも、各班によって違いはあるが、オツヤの日の昼から翌日の葬儀にかけての2日間行われるというケースが一般的になってきた。また、葬祭業者の参入や惣菜屋の登場、集落外からの参列者の増加により、その手伝いの内容にも変化が生じている。

納棺は、現在、オツヤの始まる数時間前に行われている。お棺は、火葬に共同斎場が使われるようになったことで、座棺から寝棺へとその姿を変えた。近頃では、お棺は葬祭業者の持ってくる見た目も立派なものを使っているが、それまでは町役場で売っていたダンボール製の組み立て式のものを死亡届を出す際に購入し、使用していた。これは生活改善の一環として売られていたもので、値段も高いものではなかった。また、納棺の際に入れられるものは、現在はほとんど葬祭業者が用意するようになった。ただ、それらの他に、式章（ワゲサ）などを加える家も増えてきている。式章については、京都の本山に行き、そこでオカミソリを受け、法名とともに頂いたものを持っている人も多いようで、これは一重に、集落の人々の生活に以前と比べて余裕が生まれてきたからだと考えられる。

会場設営に使われる装飾品も大きく変化してきた。以前のような身内や班の人たちの手作りによる装飾品は姿を消し、その他の必要な品も含めて、今は葬祭業者がほぼ全てを用意されている。その中でも、葬儀にひと際豪華さを加えているのが、規格品の「祭壇」だ。ある人によると、集落に最初に祭壇が登場したのは1977（昭和52）年のことだったそうだ。その他に花輪、現在では特に生花なども会場を彩るようになった。ただ以前と比べて白バス、シカ、六灯のような装飾品はサイズが一回り小さくなり、また、本来骨上げ後の装飾品だった金バス、銀バスはオツヤの段階から飾られているという。「祭壇」を使わない白バス、シカ、六灯などだけのもっともシンプルな形での葬儀が行われたのは、7、8年前が最後になるそうだ。

参列者については、一般の参列者のためのオツヤに、葬儀よりたくさんの人々が参列してい

る。また、勤めの関係で、集落外からの参列者が多くなる中、その人たちのための駐車場の整理が班の人たち（主に男性）の新しい仕事として加わった。オツヤに参列する人々の服装は、集落内からの参列者の場合、オツヤが無かった時代の名残か、喪服ではなく普段着で参列する人も多い。香典もそうだが、香典返しも志雄町で一定の基準があり、案内状を送った人と集落外から来た人にはビール券数枚を、それ以外の集落の人には石鹼3個またはタオル3枚（今はこちらのほうが多いそうだ）ということになっている。それがいつ決められたのかということについては、はっきりした年代は明らかに出来ていない。ただ、それより以前には、酒、砂糖、すしの折り詰め等を渡していたこともあったそうで、そういった荷物になるようなものを避けるためにも香典返しの変化というものがあつたようだ。また、香典については、規制により香典の額は維持されている半面、最近になって果物かごや生花、お菓子といった供物自体の数は増えてきているという。

オツヤが終わると、多くの場合、身内や故人と親しかった人、班の人たちに食事が振舞われている。ただし最近では、惣菜屋の仕出し（パック弁当）が多くなり、それは以下に記述する葬制における食事の機会にも当てはまる変化である。そのため、台所仕事も以前より楽になり、班の人（この場合は女性）が手伝うことも少なくなった。

4. 葬儀

（1）以前のあり方

葬儀が臨終の翌日に営まれていたころは、会場の準備などの関係上、式は昼過ぎに行われることも多かったと思われる。式には喪主、時にはそれに加えその家の者も、白の羽二重を着て臨んだ。一般の参列者はみな和服で、紋付の羽織・袴や着物を着て参加した。

式には、門徒となっている寺の住職（導師を務める）とその伴僧（また役僧と呼ばれ、鉦を鳴らすなど補助的な役割を担う）に加え、在所の2ヶ寺の住職、場合によっては妻の実家が門徒となっている寺の住職が招かれた。もちろん在所の寺の門徒となっている場合（むしろその方が多い）とそうでない場合など、招くゴボウサンの人数も葬儀を行う家によって変化した。この点は現在でも変わりはなく、在所の2ヶ寺の住職を葬儀に必ず招くところに、集落と寺の縁というものを見ることができ、興味深い。

葬儀において参列者の座る場所は男性と女性で分けられ、女性は奥の間に座ることとなっていた。また、焼香（杉野屋は抹香を使う）に関しても女性と男性は区別され、女性の焼香は「ウチゾウレイ（内葬礼）」の際に、男性の焼香は「ノゾウレイ（野葬礼）」又は「ソトゾウレイ（外葬礼）」の際に行われた。ウチゾウレイはノゾウレイの前に行われ、お棺を仏壇の前に移動させた後、導師が仏壇に向かってお勤めをしている間に女性が座って焼香するというものであつ

た。ウチゾウレイでは、遺族から先に焼香するというルールは当然守られたが、焼香順が細かに規定されることはあまり無かった。

ウチゾウレイが終ると、ノゾウレイへと移る。ノゾウレイではお棺を軒先にまで移動させ、ろうそくも立て直し、地面に筵を敷いて、その上で草履を履いた導師が外に置かれたお棺に向かってお勤めをした。その間に男性が順々に立ち姿で焼香していったが、このときの焼香順は厳格に決められており、一人一人丁寧に名前が読み上げられていったそう。しかし、何故、この儀式が軒先にお棺を出すような形で行われていたのか。それについては、元々このノゾウレイが火葬場前の野原に着いてから行われていたためであり、その本来のあり方のイメージを軒先にお棺を出すという形で再現しているのであろう、と説明してくれる人たちに何度か出会った。

ノゾウレイが終わると、お棺は斎場までは運ばれていくために、「シオイ」または「ショイ」と呼ばれる輿に乗せられた。シオイは白木で造られた輿で、側面に透かし彫りが施され、屋根はお棺を中に乗せるため、蓋のように取り外せる仕組みになっていたそう。このシオイは、宇土野（現在の羽咋市宇土野町）の職人によって作られていたが、葬儀の度に喪家が新たにシオイを作るということは少なく、ほとんどは斎場にあった倉庫の集落内共用のシオイを使用していた。これは、経済的に裕福だった家が、自分の家の葬儀のために作ったものを葬儀後、集落に寄進したものであった。

そして、喪主の挨拶のあと、葬儀は終了し、参列者には落雁のお菓子などが配られた。

（２）現在までの変化

喪主が葬儀で着る服装は、現在は完全に黒の礼服となっている。黒になったのは、役場がリボン（喪章）を配布するようになってからのことだそう。もともと白の着物は汚れが目立つし、保管も大変だったという。また、近年の葬儀の参列者の服装については、若い人や男性に洋服が多く、女性に関しては、故人の身内になると、わりあい和服が多く見られるということだ。

それから、ウチゾウレイ・ノゾウレイという分類は姿を消し、過去女性の席だったところに身内の者が、男性の席だったところに一般の弔問客が並ぶ。焼香順というものも、以前ほどの厳格さは失われてきた。いまや、喪主や喪主の家族以外は、家族単位で呼ばれるという焼香の場もあるそう。

5. 火葬～骨上げ

(1) 以前のあり方

葬儀が終わると、門徒となっている寺以外の住職は退場する。それから、集落の斎場までの移動となるが、この際の導師の随行は、共同斎場ができる以前のある時期から、在所ではすでに例外的となっていたそう。その場合、本来斎場で行われる、火葬前のお勤め（火屋勤行）、また骨拾いの際のお勤め（収骨勤行）は、それぞれ葬儀の後や骨上げのお勤め前に門徒となっている寺の住職や伴僧によって行われる。

集落の斎場は「サンマイ」と呼ばれ、1960年まで在所に存在し、使用されていた。立地は近くに人家の無い山あいの場所で、その近くにはさらに前のサンマイである「フルザンマイ」も建っていた。こちらも、広域斎場ができるまで存在し、故人の最後に着用した衣服やヨトギで故人を寝かした布団（掛け布団のみという話もあった）、また葬儀に使った装飾品などを焼却するのに使われた。サンマイは土台の引かれたある程度しっかりした建物で、天井も高く、屋根には吹き抜けの窓が2つ空に向かって開いており、中にはレンガ造りの囲いがあり、そこで遺体を焼くようになっていた。また、同じ敷地内に、休憩所と倉庫を兼ねる小屋があり、そこには前述のシオイ2つや葬儀に使う白バス・シカを立てる台などが保管されていた。

サンマイへの移動には、草鞋（農閑期に作ったもの）を履いた。そして、故人と血の繋がりの濃い人がシオイを担いで行く。これは主に男性の役目であったが、調査では女性で担いだ経験のある人からも話を伺うことができた。納棺の際に、豆柄を入れたのは、豆柄が火葬のときに良く燃えるということに加え、シオイを運ぶ時にお棺の中でガイが揺れる（これは担ぎ手にとって気味が悪い）のを防ぐためであった。火葬をする焼き番は喪家以外から選ばれた班内の男性4人（時にはそれより少ないこともあったそう）で、葬儀のたびに持ちまわり制で回ってきた。彼らは、火葬に使うバギ（薪）8束や藁4束、豆柄を持って斎場へと向かっていった。

火葬場に着くと、持ってきたバギを窯の中に敷き、その上にお棺が乗せられた。次に、豆柄が窯の中に入れられ、その次にお棺の上に藁を乗せたのち、親族の者がそこに火をつける。そして、焼き番を残して、ほかの者は一旦、葬儀会場である家へと帰っていった。草鞋を履いてサンマイまで来た場合は、履いて来た草鞋を捨てたのち（サンマイ又はフルザンマイで燃やした？）、家まで裸足で帰って行くか、または家についてから草鞋を捨てたそう。これは、サンマイに持っていったものは持ち帰ってはならない、という考え方があったからだという。

では、サンマイ時代の火葬風景はどのようなものだったのか。焼き番経験をした人の話によると、火加減が難しく、休憩所から帰ってきたら窯の中でガイがすくっと立ち上がっていたり、お棺の中から急に足が飛び出てきたりということが起きたそう。また、異臭もあり、フルザンマイがサンマイへの移動を余儀なくされたのも、近隣への異臭問題だったらしい。他にも、

サンマイでの火葬では内臓だけが残ってしまうという問題もあったそう（ただし、異臭問題については、集落における人口増加と斎場付近への人家の新たな建設というものが背景にあった）。

一方、親族や焼き番の人たちが「サンマイ」に行っている間、家に残った者はサンマイから帰ってきた後に振舞われる料理のための準備等にいそしんでいた。その中で、班の女性のうち何人かは、親族一行がサンマイに向かったあとすぐ、集落全戸へ「ウチイリ（又はオチリ）」を集めに向かった。「ウチイリ」とは、葬儀の晩、喪家にて開かれる「追善お座（又はオヒヤ、オヒチャ）」で喪家が門徒となっている寺の住職に納めるお講代などを、集落全戸で少しずつ負担するための寄付金のことである。ウチイリの金額に関しては、1955（昭和30）年ごろには、近年この制度が廃止になるときまで続いた1軒20円というものがすでに決まっていたようだ。

ウチイリ集めが終わるころには、サンマイから親族一行が帰ってくる。そこで、先ほどの料理が輪島塗の赤御膳で振舞われるが、この場合ももちろん精進料理であった。そのころにまた、サンマイで遺体を焼いている焼き番の人たちへお酒（1升）やおにぎり、肴などの差し入れ（このことを「ヒヤミマイ」という人もいた）が運ばれた。この時に、焼き番の人はあと何時間後に骨拾いに来るようと、差し入れの運び手に伝えた。

それに従い、親族一同は骨拾いに「サンマイ」までやって来る。それが、日の暮れ始めた時間であれば、手に灯りを持つての移動であった。骨は、炭化した薪の中から竹の箸で取られ、骨箱の中に納められていった。この骨箱はお棺と同様、在所の大工によって作成されたものである。またそういった状況の中では、のど仏を探すことも難しく、現在多く見られる分骨を行う家もあまりなかったと思われる。中には、丹念に探せばのど仏もちゃんと見つけれられると教えてくれた方もいたが、一方で、のど仏ではなく、しゃれこうべを最も重要な部位として大事に拾い上げたという話も何度か聞いた。

こうして骨拾いが終わると、家に引き返し、中陰壇を飾りつけ、骨上げの法事へと移る。

（2）現在までの変化

現在、羽咋の斎場までのガいの搬送は霊柩車によって行われている。遺族や参列者も、マイクロバスや乗用車に乗っての移動である。斎場についてからは、茶毘にふす前にお棺を開けて別れ花をするようになった。これは、故人との最後のお別れに、一人一人に渡された生花（菊が多く使われるそう）を各自が花の部分だけをちぎって、お棺の中に入れていくというもので、葬祭業者が入ってきてから行われるようになったという。これが済んだら、斎場の中に設けられた休憩所へ移動し、その場で火葬が終わるのを待つ。この時、惣菜屋の仕出し（パックのお弁当）が振舞われる。広域斎場での火葬は、サンマイでの火葬における問題の解消であっ

たといえよう。

遺族が、斎場に行っている間に行うウチイリ集めは、2、3年前にある班が止めたのをきっかけに行われなくなった。その時は班の人数が少なく集めるのが大変だったので、喪家がその分の費用を負担したということだったが、集めに行っても留守である家が増えるなど、ウチイリ集めにとって困難な要素が集落内ですでに存在していたことや、それにかかる手間と比べ金額的にも（以前に比べ）あまり大きな負担ではなくなっていたことなどから、これを良い頃合いと受け止め、どこの班でも止めてしまったのであろう。ただ、ウチイリ集めによって、初めて訃報を知る家もあり、ついでに香典も預かれるなど都合の良い点もあったという声も聞かれた。

骨拾いに関しては、サンマイでの場合とは違い、広域斎場では多くの場合、葬祭業者の手によってまずのど仏が先に確保され、骨壺に入れられている。そして、本願寺派の門徒であれば一部の骨は、分骨という形であとで京都の本山の納骨堂に持っていかれる。骨上げに使う骨箱・骨壺は葬祭業者が持ってくるものを使用している。

6. 骨上げのお勤め～追善お座

（1）以前のあり方

骨上げから帰ってきたら、門徒となっている寺の住職が、お骨の安置された中陰壇の前でお勤めをする。中陰壇はおもに床の間に設けられ、飾り付けにはそれぞれ各1対の白バス、シカ、六灯、くす玉などに加えて、金バス・銀バス各1対が新たに飾り付けられた。骨上げのお勤めは、主に親族のみの参加で行われる。それが終わると、中陰のお食事ということでまた精進料理が振舞われたが、この食事で班の人の手伝いは終了という形が多かったようである。その際には、喪家から班の人たちに感謝の気持ちとして、供物の一部や、班によっては割烹着などが渡された（現在も同様である）。

骨上げのお勤めが済むと、追善お座（オヒヤ・オヒチヤ）と呼ばれるお座が、葬儀を行った家を会場にして開かれる。これは、葬式を縁にして開かれるお講の縮小版といったもので、お西・お東という宗派（日蓮宗は除く）に関係なく開かれ、また参加もする。ただし、参加者が在所以外からやってくるということはない。また参加者の多くが女性で、多いときには80人や90人を越えることもある。また、このお座の主宰は喪家ではなく、男性がなくなった場合は興教会、女性がなくなった場合は玉日講という在所の組織が、お西もお東も区別なく受け持った。ただ、1955（昭和30）年以前のある時期まで、杉野屋天満宮より北側に位置するある一帯では、今挙げた2つの組織ではなく、やべさか講という組織がお座の世話をしていたそう。お座では、皆で「正信喝（正信念仏喝）」を挙げ、ゴボウサンの法話を聞く。また、そこで集められる参加費は喪家に渡され、お講代やろうそく代などになった。帰りには、お菓子が喪家から参加

者に配られ、終了となる。

(2) 現在までの変化

現在、骨上げのお勤めのあとに、本来1週間後に行うべき初七日の法要を続けて行う「引き上げ七日」が一般的になっている。これは、遠方から参加せねばならない親戚や仕事を何日も休めない身内の都合などにも調和している。

小さな変化としては、骨上げ後の飾りであった金バス・銀バスが、オツヤの時から飾られていることが多くなったことが挙げられる。

中陰の食事には、赤御膳ではなく、惣菜屋の仕出し（パック弁当）が出されるようになった。

お座の主宰に関しては、男性は興教会のままで変わっていないが、女性の場合は在所の玉日講が解散し、代わりに在所の各寺の仏教婦人会が受け持つこととなった。参加者には若い人は見られず（これは以前からそうだったかもしれないが）、70歳から上の人たちがほとんどで、9割方決まった人が来るという話だ。あとの1割は遺族側の人たちである。また以前のお座と同様に、現在も女性の参加が多い。これは、仏事に対する関心の他に、在所での日頃からの近所付き合いもお座への参加に繋がっているためであり、そういった日頃からの近所同士のコミュニケーションの主な担い手である女性たちは、その付き合いの中でお座やお講などへの参加を促し合っているようだ。もともと、他の集落に比べて杉野屋ではお座への参加が多いらしく、これは、どこの集落でも近所付き合いがあることを考えると、やはり高齢者を主とする在所の人々の仏事に対する関心の高さも、お座への参加を促すものであると言える根拠であろう。

また、今も昔も変わらず、お座では故人を懐かしく思い、死を近くに感じ、そして己を見つめ直すことができるという。故人を見送ってきた満足感というものも得られるようだ。それがどういったものか私には何となくでしか分からないが、きっとそこでしか味わえないような特別で貴重な体感なのであろう。

7. 葬儀後の法要など

(1) 以前のあり方

葬儀後、四十九日までは、7日ごとに法要を行う。そのたびに親族は集まり、精進料理が振舞われ、落雁のお菓子（蓮の花・葉の形）なども用意された。お勤めは、中陰壇（四十九日まで）と仏壇それぞれに行われる。また、故人の家族は四十九日まで精進料理を食べ続けるように努めた。そして、四十九日が来ると精進明けとなり、お骨は墓に納められた。墓は寺だけでなく、各々の家の持ち山にある場合も少なくなかった。四十九日に集まった人々で、形見分けが行われることもあった。中陰壇に使われた装飾品は、精進明け後に畑や墓の近くで燃やすな

どして処分された。

月参りを行うのは、今も昔も基本的に在所ではお東の家が多く、お西の家では月参りを行うことはあまり習慣にはなっていない。精進明け後には、月参り以外では祥月命日のお勤めや年忌法要、また葬儀に招いた全てのゴボウサンの寺での詞堂経や永代経がある。在所では一般に五十周期をもって弔い上げとなるが、五十周期まで行われるのは、故人のことを偲ぶ人が五十年経ったときにも残っている場合に限られるので、行えるか行えないのかはそれぞれの家の事情による。弔い上げの日には、料理なども盛大に振舞われるそうだ。これらは現在も変わっていない。

(2) 現在までの変化

まず、前述したように、初七日は葬儀当日に行ってしまうので、それを除いた7日ごとの法要が四十九日まで営まれている。ただしその間、精進料理を食べ続ける人は、食生活の変化、外への勤めの増加（外食の機会増）などの中でまず居なくなった。中陰壇の装飾品も、最近ではプラスチック製のものを葬祭業者が用意するようになったので、自分たちでは処分できず、業者に引き取ってもらっている。

また、お墓の場所も山への墓参りが大変なために、持ち山にあった墓がだんだんと里に下ろされてきた。その際、減反によって生まれた空き地に、いくつかの家のお墓が固めて建てられたりもしている。そのため、以前よりも墓参りの機会が増え、お墓に花が供えられることも多くなった。

IV. 葬制の変化に対する住民の意識

以上のような葬制の変化を集落の人たちは一体どのように感じているのだろうか。今回の調査では葬制の以前のあり方を調べる必要もあり、話を伺った人の多くは70歳前後の高齢者が主であった。そして、その人たちに限って言えば、時代が進む中で起こってきた葬制の変化に対して、以前のあり方と現在のあり方を比べて正否を述べるようなことは無かったし、むしろ、今の生活には今の生活にあった葬制のあり方が存在するということに十分な理解を持っているようだった。ただ、感情的な部分については、葬制における様式自体の変化ではなく、そういった変化にまつわるような集落内の特定の変化についての言及の場合に現れ、どちらかというといくつかの残念な想いが託されているものの方が多く見られた。そこで、以下に、それらの具体例を示してみようと思う。その内容にはⅢ.では記さなかったような事実も含まれている。

ある60歳代の男性は、近年、杉野屋での宗教観や連帯感の薄れを感じているようだ。現在のビジネスライフでは、葬儀の際の班ごとの手伝いや、その他の集落内での付き合いのために休みは取りにくいものになってきた。また、そういうことを家同士が意識するようになれば、葬儀の手伝いも頼みづらくなってしまう。また、集落の外に生活の主要な場（学校、職場など）が移っていく中で、在所でコミュニケーションはだんだんと疎かなものになってきた。車に乗れることができれば、集落の外の広い範囲にだっていつでも出掛けられる。それらによって、まだ生活範囲が今のように広がっていなかった時代における、近所同士あるいは在所内での付き合いの維持、強化という必然性も必要性も薄くなってきた。といっても、コミュニケーションのネットワーク自体は現在でも各世代でそれぞれ形成されており、若い世代には、子ども会の親同士の付き合いなどもある。だが、それらが前述したような葬儀におけるお座などの参加を促すような場となっていくかどうかということは、分からないようだ。

次に、ある70歳代の女性は、集落における浄土真宗との関わりの深さについて語ってくれた。（これも、葬儀におけるお座への参加や葬儀そのものへの参加と関係すると思われるが、）この女性によると、この集落における仏教はこれから先だんだんと寂れていくかもしれないようだ。なぜなら、以前のように生活があまり豊かではなく、医療も発達していなかった時代には、現在とは異なり、親も子供も早くに亡くなってしまうことが決して少なくなかった。そのため、死というものがすぐ近くに感じられ、死の悲しみに触れる機会も多く、それらが仏心、宗教心に繋がったのではないかと考えられるし、幸運にもそういう機会が少なくなった今は、もう仏教に頼らなくてもよくなってきたと考えられるからである。もっとも、現在は追善お座のような仏教儀礼の担い手の多くは70歳代より上の人に集中しているが、今後はそれを現在60歳代の人を受け継いでいくかもしれないという。それは、仏教は70歳を過ぎると自然と興味が沸いてくるものであり、以前はこの女性も仏教に対してあまり関心を持っていなかったからだそうだ。ただし、現在の若い人たちは外での仕事が忙しく、集落のことや、仏教のことには無関心なところがあるので、実際どうなるかわからないということである。だが、この集落に住んでいる限り知らず知らずにお寺に接しているということもあり、気付かないうちに真宗的気分が沁み込んでいっているとも思われるので、結局のところ確信的なことは言えないらしい（当たり前である）。

このように、高齢者の口から葬制の変化にまつわる集落内の変化の様子が語られる場合には、上述したような集落におけるコミュニケーションの減少や仏教信仰の弱体化を中心とした話題が、幾分か残念そうなニュアンスを含んで現れることが何度かあった。そこには、少し前の時代の集落のあり方への懐かしさのようなものが背景にあったのではないか。しかし、だからといって、葬制に対する見解を述べてくれた人皆からこのような印象を受けたということでは決

して無い。人によっては本当に平静に変化を受け取っている人もいる。また、男性より女性の方がお座や近所付き合いなど、集落内のコミュニケーションや仏教にかかわる行為の担い手であることが多いため、寂しげなニュアンスを含む傾向が強かったようにも見えた。しかし、すべては、今は今のスタイルがあるということを理解した上でのことである。

V. おわりに

今まで述べてきたことを簡単に要約すれば、次のようなことが言えるのではないか。それはつまり広域斎場の誕生、葬祭業者の参入、医療の整備などの地域レベルでの動きに、集落外への勤めの増加などの新しいライフスタイルを確立していく個々の世帯の動きが一致した結果、葬制の担い手は集落の外部の人たちへと緩やかに移行していったということだ。もちろん、葬制のすべてが外部の担い手に移行することはあり得ず、集落側にも一定の役割は残っている。しかし、葬制における集落の自立性というものはこれから先も少しずつだが薄れていくだろうということは、集落内の主に若い世代に見られるような、集落からの集落外へのコミュニケーションの重点の移動や、(まだ断定はできないが) 仏教離れから察するに、決して的外れな予測ではないと思われる。ただ、このような変化が良いとか悪いとかいうことは言えない。上の年代に属する人々の中にはそのような変化を少し残念に思っている人たちもいるし、平静に受け止めている人もいるということである。だが、今回の調査では、40歳代以下の年代の人にはあまり話を聞いていないので、その人たちがこの変化をどのように思っているかについては全くといっていいほどわかっていない。ただ、そういった若い世代の人のひとりに、班の手伝いのことや追善お座について質問したところ、「上の世代の人が普通にやっていることだし、自分もその時が来たらだけど、参加することに関しては何も抵抗は無い」ということを答えてくれた。葬制の変化は起こっていても、その方向や速度は一体どんなものか、予測がつきにくいものである。